

## <巻頭言>

# エビデンスに基づく医療政策へのDPCデータの活用

岡本悦司

国立保健医療科学院統括研究官（国際保健支援研究分野）

## Application of DPC data for evidence-based health policy

Etsuji OKAMOTO

Research Managing Director, National Institute of Public Health

DRG (diagnosis-related-group) と呼ばれる入院医療の定額払いが米国で初めて導入されたのは1983年であった。筆者が米国の公衆衛生大学院に留学した1980年代末頃、当地の医療政策論議はDRG一色であり、その評判は芳しいものではなかった。DRG導入によって病院の経営は厳しくなった、在院日数を短縮するため早期退院が増えガーゼの血が固まっていない患者まで退院させられる、粗診粗療が横行し医療の質が低下した・・・等々。

そのため当時の米国の医療政策研究は、DRG導入による影響を評価する臨床疫学的研究と、在院日数をいかに短縮し病床回転率を高めるかという病院管理的研究が主流であった。クリティカルパスと呼ばれる工場の工程管理の手法が病院の患者管理に導入されたり、DRGという患者分類 (case-mix) で重症度を補正して死亡退院率や再入院率等の医療の質指標を評価する、といった研究がさかんになったのもDRGの効果である。

DRGはまたたく間に各国に普及していったが、同時にまた、どの国でも主に病院側から強い抵抗を受けた。ましてや出来高払いを「国是」とするわが国では導入なんて不可能だし、かりに導入を試みても相当な困難を伴うだろうと思われた。しかし、結果的に、わが国のDPCは驚くほどスムーズに普及した。入院医療への定額払い導入については世界で最も成功した例といってよい。その理由は奈辺にあるのか。導入から10年が経過し、わが国急性期入院医療に完全に定着した今、歴史的評価をきちんと下しておくことが、エビデンスに基づく医療政策のためにも有意義である。

DPCは一日にしてできたのではなく、当初はJ-DRGという名称で1998年から研究が開始された。DPC前史とも呼ぶべき5年間にわたる周到な準備期間が、2003年からのDPC導入にどう導いたのか。膨大なデータを収集し日本独自の診断群分類を作成していったプロセスを解説する、当時担当者として関わった立場からの追記論文は後世に記録すべき貴重な歴史証言である。

DPCデータは医療計画の有力なエビデンスとして期待される。高山・松下論文は都道府県に配布している医療計画作成支援データブックの内容と活用事例、ならびに科学院において実施された都道府県職員向けのPDCA研修の概要を説明している。科学院で都道府県職員向けの研修が初めて実施されたのは2006年7月の総合医療政策研修にさかのぼる。当時と比べるとDPCデータに含まれる症例数や範囲は格段に増加しており活用可能性も高まった。

配布された医療計画作成支援データブックや他のデータを都道府県の医療計画にどう活用するか、を科学院でのPDCA研修を受講した経験から高知県の具体例で示すのが伴・川内論文である。DPCデータより急性心筋梗塞を抽出しアクセスマップを作成したものであり、データブックを活用すれば全国どの地域でも作成できる。急性心筋梗塞では、治療開始までの時間が救命率を左右するだけに、アクセスマップによる可視化は地域住民にとっても重大であろう。

DPCデータの強みは5000万件近いデータが病院名も含めてネット上で公表され、集計値ではあるが誰でも利用できる点にある。岡本論文は、2005～13年の9年間にわたるDPCデータを総括し、読者がユーザーとして活用する上でのガイドブックとなることを意図した。最新の2013年度データは初めて例数20未満のものも含めて全数が公表されたもので、年間に1例も存在しない「幻」のDPCが相当ある等、DPCの今後のあり方をめぐる議論に一石を投じる内容である。

最後の英文の岡本・熊川論文は、DPCデータを活用してわが国の疾病や手術ごとの入院一件当たりの医療費を算出しOECD加盟国との比較を行ったものである。これはOECDが目下進めている疾病別入院費用の国際比較プロジェクトにわが国データを提供することを目的に実施された。

去る6月に成立した医療介護総合確保法では、病床機能報告制度や地域医療構想（地域医療ビジョン）で都道府県の医療計画への権限が強化された。それを実現するため「都道府県に対し、適切な指針の提示や研修及び人材育成等の必要な支援を行う」「PDCAサイクルに基づいた制度の設計と検証ができる医療政策人材の育成」を国に求める附帯決議までされている。人材育成と技術支援は科学院の今後の使命であり、DPCデータの分析と活用は不可欠である。